

8 . 失敗した魔女 (ティルレイ ミンダナオ)

昔々、若い農民夫婦と三歳になるエリギという名の息子がいました。息子は彼のゆりかごで寝ていました。ある日、エリギは朝寝のあとで目を覚まし、ゆりかごから出ました。彼は両親がまだ藁のマットの上で寝ているのを見ました。エリギは遊びたかったのです。しかし、寝ている両親を邪魔したくありませんでした。彼は意図の小さな玉が好きで、この糸の玉で遊ぶことに、十分楽しんでいました。

しかし、ある時、エリギがその玉を空中高く投げた時、それを掴まえることができず、彼の手からすべり出て、家の床をはねて、表のドアから転がり出て行きました。楽しんでるエリギは、家を出て、糸の玉を掴まえに行きました。その玉は、今や丘を転がり降りて、家から離れて行きました。それは、ほどけることなく転がって行きます。エリギは、跳ねて転がっている糸の玉を追いかけて、そのことが、彼を家や眠っている両親から遠く離れることになることに気が付きませんでした。

ついに、疲れきったエリギでしたが、糸の玉を追いかけて、小川の所に来た時、それは止まりました。今まで、ボールは小さい位置が出ていましたが、ほとんどほぐれませんでした。エリギが小川の中を見た時、水の中で泳いでいる美しい色をした魚たちに惹きつけられました。エリギはその色鮮やかな魚のうちの一匹を獲りたいと思って、近くの小枝を見つけ、それで水を打ちました。確かに棒は魚を打ち、浮いて死んだ魚が水のおもてに居ました。エリギは自信満々で、彼は小川の方に屈んで、彼が殺した魚を引き上げました。

しかし、自信に満ちたエリギは、手に色鮮やかな魚を持った時、暗い陰が彼にかかりました。彼は周りを振り返り、嫌なものを見ました。悪い女が彼の後ろに立っていたのです。この悪い女の光景は、幼いエリギを恐れさせました。なぜなら、彼女はとても怒っているように見えたからです。悪い女はおびえたエリギの不意をつかみ、彼を抱えました。彼が、彼女の許可なく小川から彼女のフィリピンの神話と伝説 8 . 失敗した魔女

魚を盗んだ、その罰であると告げました。

悪い女は不意にエリギの腕をつかみ、木々や草の中を引きずって、エリギの幼い体は切れたり、引っかかったりしました。彼女は彼を丘に引き上げたり、引き下ろしたり、上がった、下りたりして、長い距離を引いて行き、ついに大変広い田に出ました。そこは七つの丘と七つの谷でできていて、見える限りの広大な土地でした。悪い女も、弱々しく泣いているエリギも、小さな鳥が小川からずっと彼らに付いてきていることに気が付きませんでした。

悪い女は、傷ついて血を流しているエリギを、地面に投げ出し、大きな田を指差しました。「お前の罰は、」と悪い、不快な女は言い、続けて、「この田全部を八日間で耕せ。八日目、私が帰った時、畑が耕されていなかったなら、死ぬまで叩くぞ！」と言い渡しました。そして、悪い女は急いで歩き去って行きました。みじめなエリギは、大変恐ろしかったし、疲れておなかもすき、のども渴いていたので、寝るまで泣き続けていました。小さな鳥は寝ているエリギを見て、かわいそうに思い、動物の友だちを呼んで、幼い男の子を助けてやろうとしたのです。

翌日早朝、エリギは目が覚めました。彼はおながすいて、のども渴き、そして両親がいないのに気づき、寂しく思いました。しかし、どうやって家に帰ったらいいかわかりません。彼は恐れに震えて、不快な女が彼に言ったことを思い出して、泣き始めました。「八日間で広い田を耕さなければならない。そうしないと叩き殺す。」エリギがひとり立っていると、小さな豚が高い草を飛び越えてきました。「泣くなよ、坊や。」と豚は言いました。「僕と友だちの動物が君を助けることができる。」エリギは、豚が話せることに驚きました。「ここに居なさい。」と豚が言うと、草むらの方に帰りかけました。そして「何か食べ物と飲み物を持ってくるよ。」と言い残しました。

案の定、数分後、小さな豚は、高い草を飛び越えて、またやってきました。今度は食べ物の皿を口に、そして、コップに水を入れたものを尻尾に

ひっかけて運んできました。おなかですいて、のどがかわいたエリギは、食べ物をもさぼり食べ、水を飲みました。小さな豚に、きちんとお礼を言う間もなく、エリギは、たちまち眠りについてしまいました。小さな豚は笑って、高い草むらの方へ飛んで帰って行きました。

次の日、エリギは長い睡眠のあと、目をゆっくり開けました。彼は泣いた目で見た光景に驚きました。田全体は、もう見渡す限り耕されていました。びっくりしたエリギは、もっと近づいて確かめました。彼は何百ものひづめの後を見ることができました。おそらく何千もの豚がいたのでしょう。豚の大群が彼の寝ていた一夜のうちに、広い田を耕したのでした。エリギは大変うれしくなりました。今や、悪い女は彼を死ぬまで叩けなくなりました。

案の定、八日目、悪い女は大きな田と、笑っているエリギの所へ帰ってきました。彼女がびっくりしたことには、見渡す限り、その広い田は完全に耕されていました。しかし、エリギの幼い顔から微笑みはすぐに消えてしまいました。怒った悪い女は、彼をつかんで叩き始め、叫んで「お前の仕事はまだ終わっていない。坊や、さあ、この広い田に苗を植えなければならない。八日過ぎて、私が帰ってきた時、終わっていないければ、私はお前を叩き殺す。」と言いました。そして、悪い女は出て行きました。

エリギは大変悲しくなって、泣き出しました。彼の願いは、ただ家に帰って、彼を愛し、とても寂しがっている両親のもとへ帰ることでした。すると、小さな蟻が地面に出てきて、泣いているエリギの所に登って来ました。そして、エリギの涙を避けるように慎重に近寄りました。涙は、この小さな動物を押し流してしまうからです。「泣いてはいけないよ、坊や。」と小さな蟻が言いました。「僕が君の田植えを手伝ってあげるよ。君は休んで寝てたらいい。」小さな蟻は、土の中へ入って行きました。

幼いエリギが次の日起きてみると、驚いたことに、見渡す限り、他には新しい苗が植えられてい

ました。エリギは大変うれしくなって、神に、彼を助けるために、それらの動物の友人たち、小さな豚と小さな蟻を送ってくれたことを感謝しました。悪い女は彼を叩き殺しはしないでしょう。

エリギが、稲の高く育っているのを見ると、彼も大きく、そして歳を重ねて、勇ましくなっていました。彼はもはや、毎晩寝る時、泣くようなことはなくなりました。しかし、愛する両親と離れて、ひとりであることを寂しく思い、毎日この広い田からまた家に帰れるように祈りました。なぜなら、彼は大きくなって、自分自身のことをコベと呼ぶようになっていたからです。

八日目、悪い女はもう一度帰って来ました。彼女は見渡す限り田に稲が植えられていることにびっくりしました。しかし、彼女はコベを捕まえ、叩き始め、叫びました。「お前の仕事は、終わったわけではない。若造、お前は稲を刈り、倉に納めなければならない。倉はお前の力で作るんだ。もし、米が刈れず、倉に入っていないければ、私は八日目に帰った時、お前を叩き殺す。」そして、悪い女は出て行きました。

また、コベはとても悲しくなりました。彼には八日間で稲を刈り、彼の手で倉を建てるのは不可能に思えたからです。それにもかかわらず、彼はすぐに仕事の準備にかかり、近くの森へ倉を建てるのに適当な木を集めるために出かけました。

彼はあまり遠くまで歩かない内に、彼は若い鳥の絶望的なさえずりを聞きました。それは明らかに苦しんでいる声でした。コベは、すぐに美しい鳥が大きな蜘蛛の巣にかかっているのを見つけ出しました。その若く美しい鳥は、もがけばもがくほど、大きな巣の蜘蛛の糸にもつれてしまいました。幼いコベは、これが何日も前にコベや悪い女を追って、小川からやってきた鳥で、彼を助けるように、動物たちに頼んだ、責任ある鳥だと悟りました。

たいへん慎重に、コベは若く美しい鳥を大きな蜘蛛の巣から自由にしてやりました。しかし、コベが疲れた鳥をやさしく地面に横たえてやるやいなや、びっくりするようなことが起こりました。

目がくらむような光が、煙のようにはじけました。すると若く美しい鳥は、若く美しい少女にかわったのです。その若い少女は、口がきけなくなったコベに、大きな蜘蛛の巣から救ってもらったことを感謝して、彼女はサリという名前で、悪い女の魔力の呪いによって、数年前からとりになっていたことを説明しました。

コベがもっと驚いたのは、サリが、彼の姉だと告げたことです。「僕にお姉さんがいたとは知らなかった。」コベは言葉を詰まらせました。サリは、彼女が悪い女に誘拐された時、コベはほんの赤ちゃんだったこと、だから姉がいたなんて覚えていないはずであることを説明しました。コベは、姉に会えたことで、とてもうれしくなり、彼女を暖かく抱きしめました。「心配しないで！」元気になったサリは、「一緒に私たちは悪い女をやっつけて、彼女が私たちに行った不幸のすべてをお返ししてやるわ。私は、あの悪い女が、あなたにしたことを見ていたの。しかし、私にはあなたを助けることは何もできなかった。あなただけが、悪い女の呪いを解くことができたのよ。そして、ついにあなたは、来て彼女の魔力の呪いを解いてくれたわ。」コベは、家族のひとりにまた会えたことで、うれしくて、喜びの涙を流しました。

コベと彼の新しく見つかった姉は、大きな田へ行きました。森からほんの少しの木切れを持ってきました。サリは弟に、田の土の上にそれを植えるように言いました。コベは、姉がどうして木切れを彼に植えさせるのかわかりませんでした。しかし、姉の指示に従いました。一旦コベが、68本の木を土に植えると、サリは、彼女の手をパチパチと叩き、そして、賛美を唱えました。「私の真実の霊の力によって、ここに68の倉ができるように。そして、この田のすべての米粒が守られ、そして、この米粒が茎から出たら、自分で倉に入るように。」サリが言うやいなや、68の木切れ（彼女の弟が田に植えたもの）は、大きな倉になるまで成長しました。すると、コベの驚く目の前で、米粒は自分の茎から剥がれはじめ、一団の鳥のように空を飛んで、すべての米粒は自分で68フィリピンの神話と伝説 8 . 失敗した魔女

の倉に納まって、いっぱい溢れました。しかし、魔力はまだ去っていませんでした。米粒が茎から出てゆくやいなや、空っぽの茎は空に消えて、大きな田は、また空っぽになりました。

サリは心の中にまだ魔力を持っていて、そして、彼女は若い弟コベに、田の真ん中にもう一つ木を立てるように告げました。またサリは手を叩き、言いました。「私の真実の霊の力によって、この場所に四つのすばらしい寝室と快適な家庭が入れる大きな美しい家が育て！」するとすぐに、サリが願ったとおりの四つのすばらしい寝室と快適な家庭の入れる大きな美しい家が田の真ん中にできあがってきました。

次の日、悪い女が大きな田に着きました。サリが彼女の来るのを見ると、弟コベに言いました。「悪い女の世話は私がするわ。今度は、彼女が私たちの家族に行なったすべての犠牲について、お返しをしてもらおうわ。」するとサリは、彼女の手を叩いて言いました。「私の真実の霊の力よ、火の玉を天から遣わし、悪い女をやっつけて！」サリがしゃべり終わるやいなや、巨大な火の玉が天から送られ、赦しを請うて叫ぶ悪い女を魔法のように追いかけてきました。

悪い女の叫びを聞きながら、小さな豚と小さな蟻（彼らがコベを助けて田を耕したり、苗を植えたのですが）が、やってきて、見物していました。「どうか、どうか火を止めて！」焼き殺されそうな火の巨大な玉は、すぐに彼女を飲みつくしました。火の玉は消えて、悪い女はもういなくなりました。そしてすぐ、小さな豚と小さな蟻は、男と女になりました。このカップルは、かつてはサリとコベの両親の召し使いだったのです。しかし、彼らも何年も前に悪い女の呪いにかかっていた。悪い女の死によって、呪いは解かれ、平和と調和がついにその地に戻りました。

サリ、コベ、彼らの両親、そしてふたりのしもべは、長く楽しく一緒に過ごしました。しかしある日、コベは、家族に彼らの地上での生活はすぐ終わる、と告げました。案の定、八日後、東の空から大きな土地の塊が送られてきて、しあわせな

家庭を空へ運び、天国へ行きました。彼らは、もう見えも、聞こえもしません。